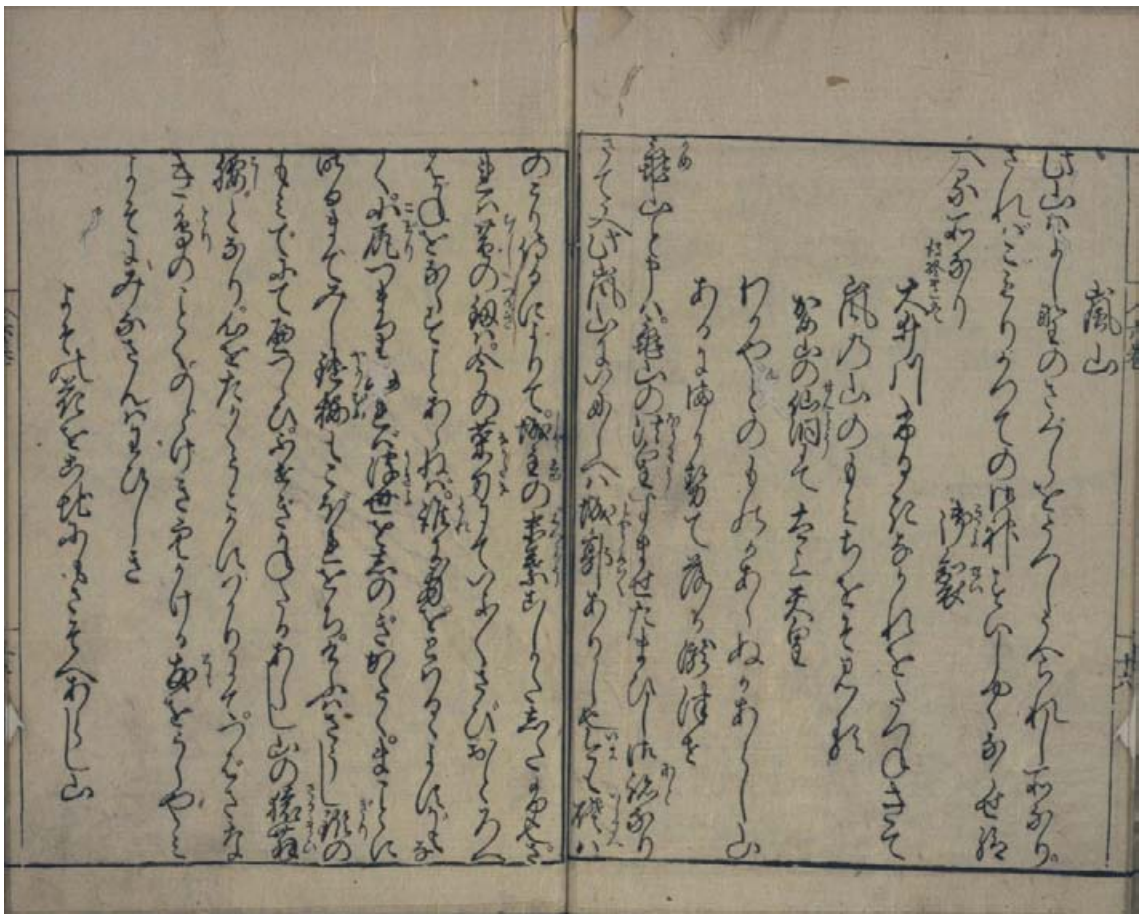
巻六「嵐山」



京都府立総合資料館蔵

京都府立総合資料館蔵

【原文】

嵐山

此山はよし野のさくらをうつしうへられし所なり。されば こもりかつての御神すいしやくならせ給へる所なり　　御製

後拾遺冬

大井川ふるきなかれをたつねきて
嵐の山のもみちをそ見る

かめ山の仙洞にて　太上天皇

わかやとのものかあらぬかあらし山
あるにまかせて落る瀧津せ

亀山と申は。亀山の法皇すませたまひし御跡なり

さて又此嵐山にいにしへは城郭ありし也今も礎は（十六ウ）のこり侍るによりて。城主の末葉こしかたしたふ也。されは昔の釼は。今の菜刀にていよ〳〵さびおとろへはがねをならすことあらねば。誰に身をとはるゝよすがもなく。小尻つまりぬれば浮世をしのぎかたく。まことに昨日までみし鑓梅もこぼれをち。けふはさうし錐のもみでにてへつらひ。ふせぎかねたるあらし山の猿舞腰となり。心をたかくうこかすばかりにて。つばさなき鳥のことく。のどけき空かける友をうらやみよそにみなさんはわひしき

よその花をこちにもさそへあらし山（十七オ）

【校訂本文】

嵐山

此山は吉野（注1）の桜を移し植へられし所なり（注2）。されば木守・勝手の御神、垂迹ならせ給へる所なり（注3）。

後拾遺・冬　　御製

大井川ふるき流れをたづねきて
嵐の山の紅葉をぞ見る（注4）

亀山の仙洞にて　太上天皇

わが宿のものかあらぬかあらし山
あるにまかせて落る滝つ瀬（注5）

亀山と申は亀山の法皇住ませ給ひし御跡なり（注6）。さて又此嵐山に古は城郭ありし也。今も礎は残り侍るによりて、城主の末葉（注7）、来し方慕ふ也。されば昔の剣は今の菜刀にて、いよ〳〵錆び衰へ、鋼を鳴らすことあらねば、誰に身を問はるるよすがもなく、小尻（注8）詰まりぬれば浮世をしのぎがたく、まことに昨日まで見し鑓梅（注9）もこぼれ落ち、今日は草紙錐（注10）の揉み手（注11）にてへつらひ、防ぎかねたるあらし山の猿舞腰（注12）となり、心を高く動かすばかりにて、翼なき鳥のごとく、のどけき空翔る友をうらやみ、よそに見なさんはわびしき。

よその花をこちにも誘へ嵐山

【注】

（1）奈良県吉野郡の吉野山は桜の名所として有名。

（2）建長年間（一二四九～五五）に後嵯峨院（一二二〇～七二）が嵐山対岸の亀山に仙洞御所を造営する際、吉野山の桜を移植したことから、嵐山の桜も吉野の桜であるとされるようになった。

（3）木守明神と勝手明神は吉野の蔵王権現配下の神。嵐山の桜は吉野の桜を移植したものなので、吉野の木守・勝手の二神が姿を現すということ。謡曲「嵐山」では二神は花守の老人夫婦として登場し、嵐山の桜の由来を語る。

（4）『後拾遺和歌集』巻六・冬（三七九番歌）に「承保三年十月、今上、御狩のついでに、大井川に行幸せさせ給ふによませ給へる」と詞書にある。承保三年は一〇七六年。今上とは白河天皇（一〇五三～一一二九）のことで、この歌はその御製（天皇が詠んだ歌のこと）。「大井川」は桂川上流の嵐山あたりの呼称。大堰川とも書く。「ふるき流れ」は延喜七年（九〇七）の宇多法皇の大井川行幸以降の先例を指す。「嵐の山」は「嵐が吹く」の意に「嵐山」を懸ける。

（5）『続古今和歌集』巻一八・雑歌中（一六六四番歌）に「亀山仙洞にてよみ侍りし歌のなかに」と詞書にある。仙洞とは退位した天皇（太上天皇と呼称される）の御所のことで、この歌は後嵯峨院の

作。「わが宿」は「亀山仙洞御所（亀山殿）」のことで、大井川を挟んで嵐山の対岸に位置する。「瀧津せ」は滝の急流のこと。嵐山から大井川に流れ込む「戸無瀬（となせ）の滝」は急流として有名。

（6）後嵯峨院の第三皇子であった亀山院（一二四九～一三〇五）は仙洞御所（亀山殿）の造営を引き継いだ。

（7）『京童』の作者中川喜雲は嵐山城主香西又六（永正四年〔一五〇七〕没）の子孫であるとされる。以下の叙述で、喜雲は祖先の栄華とは対照的な自らの零落した境遇を自嘲気味に語る。

（8）刀の鞘の先端の部分。鐺。「こじりが詰まる」とは、刀の鞘が詰まって抜き差しならない状態のこと。転じて、借金などで動きがとれないことをいう。

（9）ウメの一品種。鑓のように上へ真直ぐに枝を伸ばす。武具の鑓の意を懸ける。

（10）重ねた紙を綴じるのに使う錐。千枚通し。錐を揉んで紙に穴を通す。

（11）手のひらをすり合わせて、揉むような手つきをすること。人にへつらう時の動作。錐を「揉む」と「揉み手」を懸ける。

（12）猿が舞をする時のような腰つき。へっぴり腰。

【現代語訳】

嵐山

この山は吉野の桜を移植した所です。ですから吉野の木守・勝手の二神が来臨なされる所なのです。

『後拾遺集』・冬　　御製（白河天皇）

かつて行幸もあった大井川の由緒ある流れを訪ね来て、
嵐山の強い風に散る紅葉を見ることよ。

亀山の仙洞にて　太上天皇（後嵯峨院）

わたしの御所の領地かどうかわからない嵐山ではあるが、
現に今目前にあるのだからあるにまかせようが、それにしても流れにまかせて落ちる滝水だなあ。

亀山と申しますのは亀山法皇がお住まいになられた旧跡です。そしてまたこの嵐山に昔は城郭がありました。今もその礎石が残っておりますので、城主の子孫である私は昔を恋しく思います。ですから武士であった先祖が昔携えていた剣は、浪人となった今の私の境遇では菜刀と替わってしまい、ますます錆びついて、武名を高く上げることもありませんので、私を訪ねてくる縁者もなく、経済的に苦しくなってしまったので生活が耐え難く、ほんとにまあ昨日まで咲いていた鑓梅の花も散り、今日は鑓を錐に持ち替えて草紙錐（千枚通し）で錐揉みをするように揉み手をしながら追従し、嵐に身を防ぎかねた嵐山の猿のようなへっぴり腰

となって身を屈し、心を高くしてもじたばたするだけで、翼のない鳥のように穏やかな空を飛ぶ友を羨ましく思いながら傍観するようなわが身の現状はわびしいものです。

強い風を吹かせて他所の花をこちらにも誘い寄せてくれよ、嵐山。

（藤原英城）